

武藤幸次編

武藤幸次編

一月五日（木）

ほんの数分前まで元気に走り回っていたコーギーは、いつの間にかお行儀の良い先導役に様変わり。黒の割合が強い濃い茶色の背中と対照的に真っ白なお尻を眺めながら、のんびり散歩するのは悪くない。

冬休みで静かな三島中学校の横を通り、川に沿うように右手へ曲がる。安威川の上にかかる水色の橋を渡りかけたところで、犬のリードを握っていた孫の智希が足を止めた。

「安威川に沿って帰るよ」

我が孫ながら、まだ耳慣れない声。声変わりが落ち着けば、次第に慣れるのだろうか。足元のコーギーは白い息を吐きながらこちらを見上げる。

「お姉ちゃんによろしく」

私が持っていたビニール袋を智希に渡す。智希はケータイショップでもらったらしい、犬のキャラクターがデザインされた布マスクをつけ、河川敷へ降りて行くようにする。

「くれぐれも、走るんじゃないぞ」

「分かってるよ」

言葉ではそう返しながら、すでに軽く早歩きになっている。ビニール袋はガサガサと音を立てながら小さく揺れている。まあ、汗漏れ防止は念入りにしたそうだから大丈夫だろう。

夕暮れにはまだ早い河川敷。智希の他にも、下流に向かって走る市民ランナーの姿が見える。高架下でトランペットやオカリナでも吹いているんだろうか。ランニングコースを避けてダンスの練習に励んでいる中高生もいる。寒いのに、立派なもんだ。

よそ見をしていると、智希の姿は見えなくなっていた。

真っ直ぐ帰っても晩酌にはまだ早い。橋を渡り切って、図書館と郵便局でも寄って帰ろうか。このまま道なりに行って、Amazonの倉庫を越えれば中央図書館が見えてくる。

歩きながらスマホを取り出し、履歴から「武藤」を押す。数回の呼び出し音で、

すぐに嫁が電話口に出た。

「ああ、史穂さん。私です。先日は遅くまでどうも」

智希を送り出した件を伝え、取り留めのないやりとりをして通話を切った。その間に、交差点を渡る。伏見屋さんの豆腐を買って帰るのはまた今度だな。いや、豆腐好きの孫娘を連れて長女がウチに来るのは次の週末。立ち寄る郵便局を変えて、図書館の帰りに立ち寄ろう。

少しずつ暗がりが増えてきて、冷えも徐々に強くなる。茨工のグラウンドを見ながら右手に折れる。久しぶりの中央図書館。窓際の椅子に深く沈み込んでる同年輩もチラホラ。自習室もいっぱいだ。

いつもなら文庫本を適当に眺めて帰るところだが、ペットの棚でも見て行こう。図書館の左手奥へ歩を進めると、カバのマスクが目についた。智希のマスクとは違うリアルなタッチのカバの口元。それを身につけた姿勢の良い佇まい、流れるような所作は見覚えがある。

こちらの視線に気がついたのか、カバマスクの女性がこちらへ顔を向けた。目元しか分からないが、全体的な雰囲気はやはり見た気がする。なんとなく目を逸らし、近くの棚へ視線を向ける。興味のない本の背表紙を見ながら横目でみると、先の彼女が隣に立った。

「先日の攻略本、来週には入荷します」

「え、ああ、それはどうも」

カバマスクの君は颯爽と自動貸出機の方へ歩いて行った。新作ゲームの攻略本なんてもうどうでもいいのだけど、週末の予定が済んだらまた寄ってみよう。太田イオンの、カバマスクの書店員さん、か……。

初出 令和三年二月二日 Mediumにて公開

一月一七日(火)

テレビは朝から阪神大震災の特集をやっていた。もうそろそろ三〇年前の話。在京系の全国ネットでは当時の映像と追悼式典の映像とを流すぐらいで、恒例行事は終了した。

五年前、この辺りを襲った大阪北部地震の痕跡は、流石に目立たなくなっている。新型コロナも含めた災害続き、延々とブルーシートが残ったままかと思いきや、最近は何と見られなくなった。

夕方の日課となった散歩を兼ね、西河原公園をグルグル周り、太田のイオンへ入る。年末に買ったお酒が切れ、いつもの関西スーパーとは目先を変えて、こちらのリカーショップを覗いてみる。これという目ぼしいものは見つからなかったが、地元の清酒と読み方が分からない芋焼酎とを一本ずつ購入した。

財布から、本屋でもらった控えが落ちた。リュックに入れた酒瓶に気を付けながら、小さな紙を拾い上げる。そうそう、コレも行かないと。

エスカレーターで二階に上がり、コジマのゲームコーナーをチラッと長め、ふたば書房の前に行く。レジに向かい、注文書の控えを出すと、「浪川」の名札をつけた女性が応対してくれた。

「武藤さまですね。少々お待ちください」

流れるような動きでバックヤードに入り、賑やかな表紙の本を持って戻ってくる。

「こちらで、お間違いないですか？」

浪川さんは、ゲームの攻略本を持って見せてくれた。「間違いありません」というと、「お包みますか？」と聞いてくる。

「いえ、手提げ袋だけ」

「有料になりますが、よろしいでしょうか？」

「ええ、結構です」と答えると、厚手のビニール袋を用意してくれた。支払いを済ませながら、どこかで見覚えのあるような女性を頭の上から下まで、ジッと眺める。

「もしかして先日、図書館でお会いしました？」

浪川さんにはこやかに笑みを浮かべ、カウンター越しに商品を手渡してくれる。「ありがとうございます」

浪川さんは深々と頭を下げる。私は後ろ髪を引かれる思いもありながら、次の客へレジを譲った。彼女は目の前の客に対応する。

マスクの下をやっと見た。誰もがハツとするような美人ではないが、ちょっとぴり儂げな京美人っぽさがある。スツとした姿勢もあつて、和装がとても似合いうだ。

手に下げた攻略本の重さと、背中の酒瓶の重さを感じながら、エスカレーターを降りる。食品売り場も見て帰ろうかと思いきや、流石に特売日の夕方で人が多い。諦めてイオンを出る。

次に智希が来るのはいつになるか分からない。明日とか、明後日にでも、幸弘の家に行つて攻略本を届けてこよう。

賑やかな西河原公園の横を抜け、総持寺の駅へ向かう学生さんの後ろをついていく。私の後ろから、イオンから出てきた三人乗りのママチャリが駆け抜けていく。

安威川の方から吹いてくる風には、公園の緑の匂いが載っている。

一七一号線のところで道路を二度渡り、関西スーパの方へ足を向ける。向こうに見えた自転車を避け、後ろからやってくる自転車の気配にも気を配る。代わりに映えない、いつもの景色。

目新しい芋焼酎をどう飲むか。ああでもない、こうでもないと考えながら住宅街へ入っていく。

初出 令和三年二月一七日 Mediumにて公開

二月一七日（金）

およそ三年ぶりに実家へ帰るといふ哲朗くんは、二十歳と饞別を兼ねた祝杯を上げ、[元]総持寺駅の改札で見送った。たまたま、長岡京のお父さんのところに泊まりがけで出かけるという里紗、啓を連れた香織とすれ違う。孫娘の里紗たちは姉弟の二人だけで電車に乗り、里紗は先日返って来た数学のテストを持って、お父さんとともに振り返るらしい。

幸弘、香織を伴って自宅に戻る。自分で持って来た携帯ゲーム機で遊ぶ智希、連れて来た愛犬の面倒を見ながら、台所の志津香を手伝う史穂さん。陽菜は幸弘の家で一人、勉強に勤しんでいるらしい。

幸弘はスマホを操作して、誰かにメッセージを送った。

「陽菜か？」

「いや、哲朗くんの親御さんに。さつき、電車に乗りましたって」

「随分と過保護ね。茨木から西宮なんて、小学生でも一人で大丈夫だって」

横から香織が茶化すように言い、夕飯が並ぶ食卓にさつきと座った。彼女の場合、子供達が少々遅しすぎるところもある。とはいえ、二十歳を過ぎた男子学生に、哲朗の向き合い方も違和感がある。ボサツと幸弘を見つめていると、彼の顔がこちらを向いた。

「本当に、何にもないんだよな」

「またその話？ ドラマの見過ぎだよ」

幸弘は智希にゲームを終えて手を洗ってくるように良い、香織の隣の席に座った。

「ウチの貴重な戦力で、大事な大事な取引先のご子息だから」

「憧れの先輩に、頼むって言われてるしね」

史穂さんは犬のテディを隣に座らせて、幸弘の説明を補足した。志津香が調理に区切りをつけて、食卓に着く。智希も座って、夕食が始まった。

「一朗さん、関学じゃなかったっけ？」

香織は自分の取り皿にサラダを取り、片手で缶ビールを開けて史穂さんに差し出した。史穂さんは「すみません」とグラスを傾けながら、「明子さんの方が、

立命で同じサークルの……」と言うと、幸弘が「一コ上」と付け足した。

香織は、史穂さんのお酌を受けながら、「なるほど。そういうことか」と呟いた。

「お義姉さん、良い人すぎない？」

「本当にそう思う？」

史穂さんと香織は、お互いに少々黒い笑いを浮かべているように見える。史穂さんは智希、テデイの面倒を見ながら、自分の食事に手をつけた。

「ま、色々あるんだよ」

幸弘はそう言い、スマホに届いた通知をチラリと見て、すぐに画面を伏せた。

「親父なんて、最近もあつただろ？」

「なんの話？」と志津香が尋ねると、香織は自分のカバンから二つに畳んだチラシを取り出した。志津香にチラシを見せ、真ん中あたりを指差すと、志津香は納得したように頷いた。智希も興味津々に覗き込み、「ああ、本屋さんの。この前、サイゼリヤで写真撮ってたね」と言った。

「お父さんは、和風美人が好きだから」

志津香はそう言いながら、自分の食事を終わると調理を再開した。おにぎりを握り始めた彼女に、「すみません、お義母さん」と史穂さんも席を立てて手伝いに加わる。智希が「ごちそうさま」をすると、香織は「もういい？」と私と幸弘に聞き、答える前に空いた食器を片付け始めた。

初出 令和三年二月二四日 Mediumにて公開

二月二七日(月)

今日は朝イチでJRの踏切を渡り、普段はあまり通らない総持寺の裏を抜け、郵便局の混雑を眺めながら、市立庄栄小学校に隣接された庄栄図書館に踏み入った。小説やエッセイ、児童書の類はそれなりに所蔵してあるが、それ以外はもう少し先の中央図書館に出向いた方がいい。

新刊の傾向もあちらの方が好みだが、今日は休館日。仕方がないというか、少し目先を変えて文庫本でも手に取ってみようかとこちらに来てみた。こちらもピンとこなければ、市役所の方へ赴いて、中条図書館にでも行ってみるさ。

この数日、息子たちの周辺で話題に上がっているらしい、芥川龍之介の『河童』でも久しぶりに読んでみようか。他館で借りていた本を返却し、悠々と手ぶらで新刊のコーナーを眺め、返って来た本のコーナーもチラリと目で追う。たまに素晴らしい偶然もあつたりするが、今日はどちらもピンとくる出会いがない。さつさと文庫本の棚に足を向ける。

「あ」の棚を指して、「わ」の棚から逆に動いていると、ポケットのスマホが低い唸りを上げて震え始めた。消音モードのバイブレーションだけでも、静かな図書館では周りからの視線が集まってくる。

サツと画面を見ると、史穂さんからの電話。バイブレーションを止め、一度口ビーへ出ると呼び出しが途絶えてしまった。電話を起動して、こちらから折り返す。相手はすぐに出てくれた。

「ああ、お父さんすみません」

「いえいえ。どうされました？」

「本っ当に申し訳ないんですけど、テデイの定期検診をお願いできないかと思いまして」

電話口の向こうで、縮こまって話している姿が想像できる。愛犬の定期検診が先に入っていたのに、どうしても外せない急用が今日の今日で入ってしまった、そちらに行かざるを得ないという。

「当日のキャンセルになつてしまうと、次の予約が大分先になつてしまうので……」

非常に申し訳なきような声が聞こえてくる。その電話をすぐそばで聞いていそうなああのコーギー、テイの姿も思い描ける。まあ、アレなら意思疎通できるだろう。

「いいですよ。どちらで預かりましょう？」

「ありがとうございます。そしたら……」

史穂さんは阪急茨木市駅ではどうかというので、二つ返事で承諾する。本を借りてから向かっても間に合うだろう。落ち合う時間と駅までの道のりを頭の中で練り上げる。

「じゃあ、後ほど」

「すみませんが、よろしく願います」

史穂さんとの電話を終え、サツと「あ」の棚から芥川龍之介の『河童・或阿呆の一生』を拾い上げ、近くにあった他の文庫本も二、三冊、気になった題名の書籍を借りてみる。

図書館の外に向かいながら、貸し出しの処理を終えた本を手提げカバンに仕舞う。庄栄小学校を避けながら住宅街を進み、安威川にかかる千歳橋の方へ向かった。

途中、大きな荷物を持ってJR総持寺駅の方へ向かう浪川さんとすれ違った。

「おはようございます」と挨拶を交わす時間しかなかったが、思わぬところで知人と出会った偶然に、なんだかとても胸が弾んだ。今日はきつと、いい日になる。目の前を駆け抜けていった阪急電車に、そんな想いを投げてみた。

初出 令和三年二月二八日 Mediumにて公開

三月二三日(水)

昼過ぎには止みそうだった雨は結局、夕方まで降り続けている。雨脚は弱まっているが、両手をポケットに突っ込んで、傘を広げずに「濡れて参ろう」と歩く気にはならない。

アーケードのある商店街を通り、阪急の駅に直結しているソシオを抜け、改札の前までやってきた。間も無く、一八時。学生も社会人も、まだそれほど多くはない。

「新田さんは、直帰でしたっけ」

少し先を歩いていた浪川一輝くんが、券売機の前から戻ってきた。私の隣に立つ元娘婿、新田慎一郎くんは頷いた。

「武藤さんは、」

「私はちよつと寄り道して帰るよ。駅ナカでよかつたら、一輝くんもどうだ？」  
お猪口を傾ける仕草を試みるものの、一輝くんはちよつぴり申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「お気持ちありがとうございます、ちよつとだけ仕事が残ってます」

立ち話に花を咲かせていると、梅田行きの電車が入ってくるアナウンスが聞こえてきた。一輝くんは少々慌てて、「また今度、行きましょう」と言い残して改札内へ入って行った。ホームへのエスカレーターに乗るまで、何度かこちらを振り返って挨拶してくれる。その姿が見えなくなるまで、しつかり見送り、今度は慎一郎くんの方を見た。彼は微妙な緊張感を残したまま、私が次に何をやるか、気にしているようだ。

「直帰なら、君も同じ電車でよかつたんじゃないか？」

「その通りなんですけど、一服してから帰ろうかな、と」

一杯引っかけて、にはならないらしい。

「キミと行った喫茶店なら、もう無いぞ」

「そうらしいですね。この間、近くまで行ってビックリしました」

慎一郎くんは落ち着いた表情で、穏やかに言った。彼は親指を立てて、背後の喫茶店を指した。

「とりあえず、アソコにします？」

「ああ、いや、私は私で、適当に一杯引っかけてから帰るさ」

「そうですか……」

彼は一瞬腕を組むと、肘の辺りを指先で軽く叩いた。腕組みを解くと、「じゃあ、ここで失礼します」と軽く頭を下げた。慎一郎くんは「お気を付けて」と言い残り、改札の向かいにある喫茶店へ入って行った。

彼が改札の前を離れると、徐々に人の往来が激しくなってくる。後ろ髪を引かれる思いで後ろ姿を見送っていたが、早々に切り上げて駅の南側へ向かう。二階の突き当たりにある中華屋か、その手前辺りにある串揚げ、隣のニューミュンヘンにでも行けば、傘を気にすることなく飲んで帰れる。

改札を避けて奥へ進み、南側の改札前を通り抜け、市立ギャラリーの横を進む。水曜日だからか、一八時過ぎの駅ナカでも、人通りが若干少ない気がする。JRの方に向かっていけば、選択肢はもつと少なかっただろう。

洋菓子の焼ける甘い匂い、ラーメン屋のスープの匂いに、パスタ屋のニンニク臭。魚の匂いも心惹かれるが、「いちご大福」の文字も捨てがたい。一杯引っかけて帰るのを辞めて、和菓子のお土産を買って、まっすぐ帰ろうか。

桜餅と花見団子も旨そうだ。二つずつと手提げ袋を買い、小銭を一枚ずつ数えながら、志津香の表情を脳裏に思い描いた。

初出 令和三年四月二五日 Mediumにて公開

四月一二日(水)

学問に励む若人、仕事に精を出す現役の皆さん、子育てに全力を尽くしている若い夫婦を眺めながら、昼日中から飲むビールは非常に旨い。ビアガーデンが本格化するにはまだ少し早い季節だけれども、日差しの強さだけは早々に初夏を思わせる。

頬を撫でる風に春っぽさを感じながら、もう一口ビールを飲んだ。

「いやあ、郁美さんは残念でしたね」

私の前で小さめのランチビールを楽しんでいる香帆さんに笑いかけた。

「仕方ないですよ。お仕事ですから」

彼女は口に手を添えながら、ランチメニューのお肉を頬張った。しつかり味わって食べる様は、非常に可愛らしく見える。先日の現場で見せた真剣でカッコ良さすら感じさせた人と、同一人物とはにわかには信じ難かった。

今日は不在の郁美さんも、非常にカッコいい仕事ぶりだった。彼女は普段から男勝りな勝負な人だったけれど、厨房に並び立っていた香帆さんも、郁美さんの相棒として一切引けを取らない逞しきを見せていた。

「旦那さんは良かったんですか？」

香帆さんは頷いて、「そちらの奥様と一緒にです」と切り返した。声をかけるだけかけたけど、相手が誰と何をするかにはさほど興味がない、らしい。志津香は今頃、お友達と共に美味しいランチを食べていることだろう。

そう思ったら、もう二、三杯はビールを飲んだって許されそうな気がする。グラスを空けた香帆さんにも、お代わりを勧めてみる。

「じゃあ、折角なんで」

「さすが香帆さん。そうこなくっちゃ」

ウェイターを呼んで、二人分のお代わりを注文する。ビアカクテルも興味はあるが、エビスの変わり種を頼むぐらいが丁度いい。ウェイターは注文を確認すると、空いたグラスと皿を持って厨房の方へ歩いて行った。

「あら」

香帆さんはお店の外を見て声を上げた。視線の先には、お友達と連れ立って校

舎の方へ歩く哲朗くんがいた。ややあつて、彼もこちらの視線に気がついたらしく、顔を上げて軽く会釈した。

「こうやって見ると、彼もまだまだ若く見えますね」

香帆さんは、テーブルに運ばれてきたビールを受け取り、一口飲んだ。

「利発で仕事もできて、立派な青年ですよ。本当に」

あれで性格の一つでも悪ければ難癖も付けられたのに、温厚な好青年というのができ過ぎな気もする。息子の下で仕事をするにはもつたいない人材にも思えるが、何故か彼は幸弘をとても慕ってくれている。

ビールを一口飲んで、喉を湿らせる。「コハク」の濃さを味わいながら、言葉を組み立てる。

「香帆さんは、私の息子をご存知でしたよね？ 私の愚息と彼、似てると思いませんか？」

香帆さんは「うーん」と小さく唸りながら、少し上を見て考える。ちよつぱり遠くの哲朗くんを何度か見て、しばらく間を置いたのちに口を開いた。

「ザックリ分類すれば、顔立ちは同系統な気はしますけど、雰囲気というか、空気感は全然違いますよね」

「親子には見えない？」

「そこまでマジマジとは見てませんが、他人の空似じゃないですか？ 鼻とか目元とか、結構違うような……」

香帆さんに言われた通りに、哲朗くんと幸弘とを比べると、確かに造作の差異はそれなりにあるような気もする。ということとは、

「私が考え過ぎ？」

「だと思います。あくまでも、私は、ですけど」

香帆さんは口元に笑みを浮かべながら、グラスを傾けた。第三者から見てもそう思うなら、そうなんだろう。脳裏の悩みを片隅に追いやって、ゆつくりビールを飲んだ。さつきより幾分も豊かな香りと味わいが広がって、私は幸せな気分に包まれた。

初出 令和三年五月四日 Mediumにて公開

四月一六日(日)

浪川さんと陽菜の注文をカウンターまで受け取りに行つて席に戻ると、浪川さんと談笑していたはずの陽菜は、横に置いていた参考書を開いて勉強を再開した。勉強の邪魔にならない場所へ彼女の分を置き、浪川さんにもドリンクを差し出した。中身は確か、私には名前もよくわからない、期間限定の冷たいドリンク。

「すみません。奢ってもらっちゃって」

浪川さんは申し訳なさそうに手を出して、ドリンクを受け取った。今日は珍しくスポーティな装いで、ちんまりと座っている様子が非常に可愛らしい。

「いいいえ、お気になさらず。娘さんに奢るのは、ジジイの数少ない楽しみですから」

「じゃあ、遠慮なく」

彼女は太めのストローをくわえ、勢いよく吸い込んだ。陽菜は浪川さんに少し遅れて、自分のドリンクを飲む。すぐに視線を手元に落とし、勢いよくペンを動かしていく。

「寄り道までお付き合いしてもらつて、本当にありがとうございます」

浪川さんは座つたまま深々と頭を下げた。

「いいいえ。孫娘のワガママついですから」

陽菜の向かい、私の隣の席に置いてあるユニクロの大きな袋をチラリと見やつた。なんとか自立している袋の下に、もう一回り小さめの袋も隠れている。

浪川さんと、今日のできごとを話していると、胸ポケットに入れたスマホが振るえた。「もうすぐ着く」と、幸弘からのメッセージが届いていた。頭頂部しか見えない陽菜に、「お父さん、もうすぐ来るつて」と言つたのに、彼女はうんともすんとも言わず、ペンを動かす速度を微塵も変えずに勉強を続けている。

「浪川さんは、どうされますか？」

陽菜はこの後、幸弘が迎えに来て、ここで食事するなり、車に乗つてそのまま帰路に着くなりするのだからけど、この後の浪川さんは予定を聞いていない。彼女は再び申し訳なさそうに、「すみません。お心遣い、ありがとうございます」と言つた。

「適当に本屋でも見て、歩いて帰ります」

「良ければ、送りますけど」

まだまだ明るい時間帯だし、そこまで治安が悪いとは思わないが、一人でぼつぼつ帰るのは気が引ける。浪川さんには「いえいえ。どうしてもって時は、兄でも呼びますから」と丁寧に断られた。

「そういえば、この間の攻略本、役に立ってますか？」

彼女は、年始にこの書店でやり取りしたことを思い出したらしい。楽しげな声にこちらも心踊らせながらいい返事をしたのだが、移り気な智希は攻略本どころか、ゲームそのものの話すら、最近では聞かせてくれない。もっぱら、部活のテニスと犬の話題ばかりだ。

「それが、残念なことに飽きちゃったみたいで」

「そうですか……。もう、三カ月ですもんね。仕方ないなあ」

浪川さんは遠くを見ながら、ゆつくりとドリンクを飲んだ。彼女がどこを見ているのか視線を追いかけっていると、彼女は「あ」と声を上げた。浪川さんはテーブルを軽く指で叩き、隣の陽菜に「お父さん、来たよ」と合図した。陽菜は面倒くさそうに顔を上げ、店外の駐車場からゆつくり近づいてくる幸弘の方を見た。

初出 令和三年五月六日 Mediumにて公開

五月二日（火）

連休前日の株式会社△サイズは、久々にのんびりムードが流れているようだった。年度末の繁忙期、地方選挙前後も忙しそうにしていたが、今日は割と緩い雰囲気がおフィスに漂っていた。

「親父もすっかり、そっちの一員だね」

幸弘は私が持ってきた袋の中を覗き込んだ。「どれが、どれだっけ」という息子に、一つ一つ説明してやる。「じゃあ、これにしよつかな」と、一番上の弁当を手を取った。

「哲朗くんと、浪川さんに先に選ばせてやれよ」

幸弘は私の前にどっかりと座り、割り箸の袋に手をかけていたが、「それは、そうだな」と手を止めた。彼が席を立ち、哲朗くんたちを呼びに行っているのを眺めていると、後ろから「私もいるんですけど」と香織に声を掛けられた。

「あ、すまん。三つしか持ってこんかった」

私の声が聞こえたらしく、向こうの方から哲朗くん、浪川さんの困惑する表情が見える。香織は「ごめんさい、気にしないで」と二人に向けて言った。

「兄貴のを一口もらうわ」

幸弘は二人を連れてこちらに戻ってくると、香織に「相変わらず、食い意地張ってるよなあ」と言った。香織は「あら、悪い？ 味にうるさいシンママの意見も大切でしょ？」と切り返した。若人二人は慣れた様子で、私に「いいんですか？」と訊いた。

「好きなもの、といっても種類しかないが、遠慮なく。アンケートも、よろしく」  
幸弘が先に選んだハンバーグ弁当の外に、野菜がメインのヘルシー弁当、魚がドンと入ったシャケ弁当の三つから、浪川さんがシャケ、哲朗くんがヘルシー弁当を選んだ。

「哲朗くんが、ハンバーグでもいいんだぞ」

「いえいえ。野菜好きなんで」

哲朗くんは弁当を手にも、浪川さんと並んで座る。蓋に貼ったQRコードにスマホをかざしながら、心底楽しそうに笑っている。

「あれが自然体っていうんだから、恐ろしいよなあ」

幸弘もスマホにアンケートを表示しながら、ハンバーグに箸をつけた。香織も横からハンバーグを小さく切つて口に運ぶ。一瞬目を丸くすると、その後はしっかり味わうように、ゆつくり咀嚼する。

「本当に、無理してないのか」

「執着しないというか、切り替えが早いのは、今の子っぽいけどね」

香織はスマホを何度かポチポチすると、「ごちそうさまでした」と割り箸を片付けに行く。

「臆病というか、要領がいいというか」

幸弘は一つ一つしっかり味を確かめながら、アンケートに回答していく。食べては応え、答えながら話す。消化には悪そうな気もする。アンケートの取り方は工夫の余地あり、か。

「でも、お父さんに反発する気概はあるのよね」

香織はお茶を入れて戻ってきた。哲朗くんたちの方を見ながら、お茶を啜る。

「要所要所で、結構頑固だし」

「こういう仕事には、必要だからね」

幸弘は、残りの漬物を摘みながら、ご飯を少しずつ口に放り込んでいく。

哲朗くんは、隣の瑞希さんと楽しそうに弁当を食べ進めている。彼らもそろそろ食べ切るようだ。

「あの若さで、か」

「そう。お父さんとか、兄貴とは比べ物にならない、いい男」

香織の言い方にカチンと来る部分も無くはないが、内容に異論はない。イマドキの若者も、悪くない。

初出 令和三年五月二三日 Mediumにて公開

六月二五日(日)

久しぶりな気がする二人だけの夕食を終え、食卓で大河ドラマを見ながらビールを飲んでいる。志津香が鼻屑にしている俳優が出てくるというのに、彼女はただテレビに背中を向けて、洗い物を片付けていた。

「もう直ぐ、出るんじゃないのか？」

私は、水の音に負けないよう大きめの声で言った。

「もう終わるから大丈夫。見逃したら、再放送でも見るわ」

洗い物ぐらい私にもできるのに、彼女はこちらを振り返ることもなく食器を洗い終わると、自分の手を洗い、タオルで手を拭いた。エプロンを外し、近くの椅子の背に引つ掛けながら、私の隣に座った。

「お前も飲むか？」

彼女は私のグラスをチラリと見て、首を横に振った。

「お昼も飲んだし」

「お茶は？」

志津香が小さく頷いたので、私は冷蔵庫から麦茶を取り出し、新しいグラスを出して注いだ。彼女はお茶で喉を潤すと、全身でテレビに向き合った。これ以上は、変に話しかけない方が良さそうだ。

私もテレビに視線を向けるが、彼女が見るからつけているだけで、話の流れや配役がよく分かっている。妻の楽しい時間を邪魔しないよう、ひっそりと隣に座って、静かにグラスを傾ける。

今日は久しぶりに二人で電車に乗り、梅田まで出かけて帰ってきた。普段は子供らや孫がいるか、車で出かけることが多く、出先で一緒に飲酒する機会なんて滅多になかったが、今日はうめきた広場でやっていたキリンのフローズンビールを楽しんだ。

夜からの雨予報に備えて早々と切り上げてきたものの、屋外でビールを飲む妻を、もう少し見ていたかった気もする。もう一度強い雨が降れば、そのうち梅雨も明けて夏本番。今年の夏は彼女も連れ回して、外での飲食を楽しむのも悪くない。

私の視線を感じたのか、志津香がこちらをチラッと振り返り、「何？」と言った。私は「別に」と視線を逸らし、食卓の端に積み上げられたチラシの山に目を留めた。今日出掛けた時にもらってきたのか、旅行代理店のパンフレットがいくつか積み上げられている。目的地はそれぞれ、ハワイにニューカレドニアにモルディブ。それから、サイパンやグアム、ベトナムといった地域も混ざっている。

中は我々よりもグッと若い世代、ハネムーン向けらしいパッケージプラン、写真が載っていた。ハワイは我々もほぼ半世紀前に新婚旅行で訪れたけど、もう随分変わってしまったようだ。

青い海や広い空の写真から顔を上げると、志津香がテレビを消して、こちらを見ていた。空になったグラスを持って、流しに運ぶ。私のグラスも一緒に片付けてくれた。

「旅行、行きたいのか？」

「そうねえ。新婚旅行ぶりのハワイとか、『天国に一番近い島』のニューカレドニアとか、『深夜特急』をやってみる、とか」

志津香の思わぬ冒険心に内心驚いていると、彼女は「冗談、冗談」と大きな笑顔で笑かせた。

「あなたが免許返納する前に、車で温泉旅行ってところじゃない？」

「二人だけのドライブ旅行か」

「なんだか、終活っぽくなっちゃうけど——」

志津香はそこで言葉を切ると、グラスをさっと洗って水切りカゴに伏せた。

最後のドライブ、意外とすぐだな……。

初出 令和三年六月一二日 Mediumにて公開

六月三〇日（金）

向かいの席に座っている哲朗くんは、テーブルの下を向いて、何やら難しい表情でメッセージを打っている。相手は浪川さんか、あるいは最近、距離を詰めてきている女流作家の先生か。将来性は私にはよく分からないが、家柄も性格もそんなに悪くない彼は、案外モテるらしい。

本人にその気はあまりなさそうところが、かえってモテるのかもしれない。

「哲朗くんは、夏休みはどうするんだ？」

メッセージを打ち終えたところに、声をかけてみた。彼は苦笑いを浮かべて、「別に、仕事ですよ」と答えを濁した。

「せっかく彼女もできたんだ。海でも山でも行けば良いのに」

幸弘はお代わりのビールを選んでテーブルに戻ってきた。今度は黒いビールらしい。

「一人がアレなら、一輝さんと沙綾さんも呼んだら良い」

「山に行くんなら、香帆さんらに声をかけてバーベキューもできるんじゃないか？」

私の提案に、幸弘は珍しく同意して、「撮影チームの懇親会って形なら少しは援助できるかも」と付け加えた。

「みんなでバーベキューは楽しそうですね。でも、スケジュール調整が大変そうだな」

彼はそう呟くと、手元のビールを一口飲んだ。まだ苦味に慣れていないのか、喉越しの良さが分かっていないのか、小さな一口で少々顔を歪める。

「そう言う親父は、母さんと旅行なんだって？」

幸弘に話した記憶はなかったが、私が彼の顔を見つめていると、彼はスマホを握って、「母さんから聞いた」と言った。

「最後の家族旅行って、いつだっけ」

「アレだ、あの地域振興券の時に行った城崎温泉だ」

「そうだった、そうだった。カニもないのに夏場に行って、香織も真琴もブルー文句言ってたっけ」

別に淡路島でも四国でも和歌山でも良かったけど、みんながあまり行かない方に行ったら、そこまで混雑しなかった代わりに喜ばれることもなかった、ちよつと悲しい思い出だ。

あれから幸弘は社会人になり、香りが高校生、真琴が中学生になり、家族揃って出かけることはなくなった。志津香と二人でちよこちよこ出かけることもあったけど、Gotoの時に出かけ損ねて以来、最近はご無沙汰している。

「お前のところも、そろそろ家族揃っての旅行は最後じゃないか？」

「陽菜の大学受験も考えると、確かにそろそろ最後だなあ。今からじゃ夏は間に合わないし、秋か冬か」

幸弘はぶつぶつ呟きながら、一人の世界に入っていく。私は黙って話を聞いてくれていた哲朗くんに視線を向ける。

「お盆には、実家に帰るのかい？」

「わざわざ帰るってほどの距離でもないですけど」

「——お父さんの誕生日には、帰ってやってくれよ」

横から幸弘が割り込んで、熱のこもったメッセージをぶつける。

「ウチの大事な取引先だから、よろしく頼むよ」

「分かってますって」

幸弘は「分かっていればよろしい」とビールを呷った。今日は珍しく、早々に酔っ払っているらしい。私が「困ったもんだな」と哲朗くんに視線を送ると、彼は小さく頷いた。

初出 令和三年六月一五日 Mediumにて公開

七月二五日（火）

平日夕方の茨木駅は、帰宅ラッシュには僅かに早いとはいえ、人の流れが増え始めた。鉾次を連れ、真琴は、「もう少し早く出ればよかったね」と呟いた。

「総持寺で降りて、車で帰るか？」

一駅分歩いて車を取りに行くには、少々距離がある。幸弘に訊いて、彼の車を借りて送るという方法も、なくはない。首からストラップで下げ、胸ポケットに収めていたスマホを取り出していると、真琴は「いいよ。電車で帰る」と言った。「途中で新快速に乗り換えても一本だし、あんまり遅くなるとお母さんにも悪いし」

彼女は、一人遊びを始めていた鉾次の背中に「さ、帰るよ」と声をかけ、子供の背中に手を添えた。顔だけ私の方に向け、「じゃ、お母さんとお兄ちゃんによろしく言つといて」と言い残すと、こちらの返事も待たずに改札を通って行った。ホームへ降りる手前で一度立ち止まり、鉾次と共に振り返って手を振った。鉾次は母親にされるがままに付き合っ、真琴と共にホームへ姿を消した。私は二人の姿が見えなくなるまで見送って、早めの帰宅ラッシュを妨げないように、駅の東側にあるデッキへ出た。

出入り口を塞がないよう、図書館の返却ポストの方へ避け、スマホを取り出した。

——もうすぐ、智希が駅に着きます。

五分前に来ていた史穂さんからのメッセージ。返事を打つ前に、「オアシスの前にいる」と智希からのメッセージが届いた。「いま行きます」と返事を打ちつつ、そちらへ降りるエスカレーターに向かう。

エスカレーターを降りたところから少し離れて、智希が愛犬と共に立っていた。テディは落ち着いた様子で智希の横でお座りしている。

「これが、お土産？」

智希は、私が両手に下げていた紙袋を指差した。私は頷きながら、右手で持つ

ていた方を差し出す。

「鉦次が退屈そうにしてたぞ」

「そう？ 啓も居たんでしょ？」

今日のお出かけには、陽菜や智希にも声をかけたものの、陽菜には「勉強があるから」と断られ、智希には「部活があるから」と断られた。おまけに今日は、史穂さんも忙しいらしく、テデイの散歩も智希に押し付けられていた。

彼のロードワークを兼ねたお散歩コースの途中で、今回の荷物の受け渡しを組み込まれたに過ぎないらしい。彼は紙袋を受け取ると、すぐさま「じゃあ」と背中を向けた。私はその背中に「家まで送るよ」と声をかけた。

「いいよ。まだまだ明るいし、中一の男子だけ？」

彼は「テデイもいるし」と、足元の愛犬に声をかけた。

「ペットの散歩には付き合えて、ジジイの散歩には付き合えないか？」

智希は少しだけ不服そうな表情を浮かべるも、小さく息を吐くと「行くよ」とテデイのリードを軽く引いた。私は、彼らに置いていかれないよう、歩き始めた。

智希はまっすぐ消防署の方へ向かわず、次の信号を右手に曲がって、岩倉公園の方へ足を向けた。遊具ではしゃぐ子供たち、芝生で駆け回る学生の姿が見えてくる。公園の前で動きを止めた愛犬に、智希は「十分、遊んだだろ？」と声をかけていた。

初出 令和三年九月九日 Mediumにて公開

八月七日（月）

久々に、月曜日の中央図書館にやって来た。午前中にも関わらず、いつもより人が多いような気がするのは夏休みの真っ只中だからか。奥に見える自習室も満室のようだ。中高生ぐらいの受験生のみならず、課題図書を求める小学生や、長期休暇のお供に、絵本や児童書を求めに来た親子連れもチラホラ見える。

入ってすぐの返却窓口の列に並ぶ。右手の予約受取のコーナーも、普段より利用者の出入りが多いような気がする。自分の番を待つ間に、肩から提げたマイバッグから本を取り出した。三冊の文庫本をまとめて右手に持ちながら、順番に捌かれていく様子を眺めている。

流石に今日は人数が多いらしく、いつもは別の役割で使われている向こうの窓口まで、返却対応に活用されている。いま一組終わり、次の組が呼ばれた。四、五歳ぐらいの女の子と、その妹を連れた親子連れ。夫婦だろうか。大人は二人も付き添っている。

奥さんの方は、なんとなく見覚えがあるような。顔立ちがよく似た旦那の方は、奥さんより大分年若に見える。

「次の方、どうぞ」

よそ見をしていると、自分の前が空いていた。職員の視線が私を捉えている。私は後ろに並んでいた人に「すみません」と軽く頭を下げながら、そそくさとカウンターの前まで歩を進めた。手に持っていた本を職員に差し出す。

文庫本は一冊ずつ変なものが挟まっていないか、汚れがないかをチェックされ、機械に通された。一冊だけ奥の棚に置かれ、残りの二冊は「後ろの棚へお願いします」と戻ってきた。全て「E」の棚に置けほしい。

しかしながら、「かえってきた本」も思わぬ出合いが待っている。大して用もないのに「三〇〇」番台のワゴンを見てみたり、「八〇〇」番や「九〇〇」番のコーナーの前も歩いてみる。今回はあんまり面白い出合いはないらしい。「M」のコーナーも今一つ。大きな「E」の札がついていた棚に本を返した。

あとは、新着のコーナーと特集コーナーをチラッと見て、適当に文庫本のコーナーを眺めて帰るかな。目ぼしい本、どうしても読みたい本に、今日は縁が無さ

そうだ。

「あら、武藤さん」

「児童書は二階」と案内が貼つてある階段の前で、さっきの奥さんに呼び止められた。「ああ、どうも」と普段より声を抑えながら、名前を思い出そうと必死に頭を働かせる。

「森田の妻です。先日は、ありがとうございます」

彼女は子供たちに階段の前を塞がないように促しながら、私に軽く頭を下げた。そうだ、森田さんだ。二人のお嬢ちゃんも、ついこの間ご挨拶したんだっけ。でも、後ろにいる男性は、私の記憶にある「森田さん」とは明らかに別人だ。

森田さんは何かを察したらしく、後ろの彼を指しながら「弟です」と言った。男性は「どうも」と挨拶してくれた。そう言われると、全体的な雰囲気似ているような……。

雄輔と名乗った彼は、姪っ子ちゃんに促されて、貸出機の方へ連れて行かれた。森田さんは、私に軽く頭を下げ、彼らをゆっくり追いかける。私は私で別れのやり取りをした後、文庫本の棚の前へ移動した。

初出 令和三年九月一九日 Mediumにて公開

八月三十一日（木）

久々に朝から降り続いた雨は、陽が落ちると共に小康状態になってきた。日付が変わる頃までには完全に上がりそうだ。そして日付が変われば、いつの間にか九月。まだまだ残暑は厳しいものの、あつという間に本格的な秋がやってきそうだな。

フロントのワイパーと、ダッシュボードの時刻表示を眺めていると、助手席側のドアが開いた。ビルから小走りに出てきた幸弘が、傘も持たずに乗り込んでくる。

「いやあ、一日付き合わせて悪いね」

彼がシートベルトを締めるのを待って、車を走らせる。

「構わんさ。どうせ、暇だしな」

幸弘は折り目のない封筒を私に差し出した。私は顔をしかめて首を振る。

「受け取ってよ」

「今日は、ただの暇つぶしだ」

幸弘は「あ、そう？ 悪いね」と封筒をカバンにねじ込んだ。

「しかし、遅くなっちゃったな」

彼は窓の外と、目の前の時計を見ながら呟いた。

「子供らは、明日から二学期だろ？」

「大人にはただの月初だけどね」

確かに、幸弘の言う通りだ。夏休みが終わるからと言って、親の方に特別な準備は特にならない。母親はまだしも、父親の存在感は希薄だろう。私もそうだったに違いない。

「俺と違って、二人とも優秀だから宿題だなんでも全くないし、陽菜は普通に登校日だったし、完全にただの木曜日だよ」

幸弘はなんだか自慢げだった。陽菜はともかく、智希も計画的に宿題を終わらせているとは。遊びと部活と愛犬の散歩ばかりのイメージだったが、優秀な姉のおかげか、史穂さんのおかげか、私の愚息よりはよっぽど出来るのか。

いつだったか、最終日でも宿題が終わっていないと泣きつかれて、提出期限ギ

リギリまで付き合わされたこともあったつけ。あれは、幸弘が小学三、四年生の頃だったような記憶がある。香織や真琴はそんな兄を見ていたからか、私や志津香に怒られることもなく、ちゃんとやるべきことをやっていたな。

家庭の中では少々問題児のイメージだった幸弘が、今や色んな人を結び付けている立派な経営者になっているのだから、人生、何があるか分からない。彼のおかげでたまに小遣い稼ぎさせてもらっているなんて、当時は予想だにしなかった。「この後、うちに寄ってく？」

さっきまでスマホをいじっていた幸弘は、一通り連絡が終わったらしく、画面から顔を上げて私の方を見た。

「家で母さんが待つてるから、まっすぐ帰るよ」

私の返事に、幸弘は気のない様子で「そつか、そつか」と返した。彼はスマホを見ながら、「え〜」と少々気になる声を上げた。

「非常に申し訳ないんだけどさ、平和堂で降ろしてもらってもいい？ 醤油が切れたんだって」

信号で一時停止すると、彼は史穂さんからのメッセージを私に見せた。

「醤油だけ買うのに待ってもらうのもアレだし、そこまで来たら歩いて帰れるし」

幸弘は窓の外をチラリと見上げながら言う。雨も、ほとんど降っていない。気になるようなら、平和堂なり、そのコンビニなりで傘を買えば間に合うだろう。

「じゃあ、そこでいいか？」

私は車を少し先に進め、後ろをしつかり確かめてバス停の少し前で停めた。

「ありがとう。じゃあ、また」

幸弘はサッとシートベルトを外し、自転車に気をつけながら外へ出た。私は彼が手を振るのを横目で見ながら、元の流れに合流した。

初出 令和三年一月一日 Mediumにて公開

九月三日（日）

史穂さんが、志津香の代わりに台所へ立つて、洗い物をしてきている。里紗は志津香を椅子に座らせて、小気味いいリズムで肩を叩いていた。陽菜や智希は手持ち無沙汰そうに各々のスマホを眺めている。

「だから、兄さんの時みたい盛大にやったらいいじゃない」

香織は自分が買ってきた食後のアイスを、啓と分け合いながら持論を強調した。「ねえ」と幸弘の同意を得ようとするものの、幸弘はリモコン片手にテレビを見たまま静かに否定する。

「父さんは父さんで、自分たちだけの計画があるんだよ」

幸弘の目が私に向けられた。

「夫婦水入らずで、カッコウつきたいんだって」

幸弘の物言いに、香織は即座に「何それ？」と反応した。「ダッサい発想」とも付け足した。幸弘はケラケラ笑って受け流す。

「肝心なのは、バアちゃんはどうしたいかじゃないの？」

周囲の話など聞いてなさそうな智希が、ボソツと呟いた。まだ何かいいたそうな香織も、流石に言葉を引っ込める。ここからでは横顔しか見えないが、志津香の口元は僅かに笑みを浮かべているような気がする。

「そうねえ、お父さんがやりたいようにやってくれたら、それでいいわ」

志津香は、肩を叩いてくれた里紗に「ありがとう」と言うと、椅子から腰を上げた。洗い物を終えたばかりの史穂さんの隣へ行き、「後はやるわ」と引き継いだ。少々不機嫌そうな香織から、空になったアイスのカップを受け取り、全員分のカップが入ったゴミ箱へ捨てた。

香織は啓を連れて洗面所へ行った。すぐに水の流れる音が聞こえてくる。

幸弘は壁の時計に目をやり、椅子に腰掛けたまま身体を伸ばした。

「さ、そろそろ帰るぞ」

彼は子供たちに声をかけ、一足先に玄関へ向かった。入れ替わりに香織が戻って来る。

「順番にトイレを済ませて帰るよ」

香織の声かけに混ざって、誰かが水を流す音が聞こえた。少しの間を置いて、玄関の扉が開く音も聞こえてくる。幸弘は、車のエンジンをかけたらしい。

子供たちはお互いに譲り合って、順番にリビングとトイレを行ったり来たりする。史穂さんは、志津香から何かを受け取っていた。

「送って行こうか？」

私は香織に声をかけた。香織は「いいよ。阪急で帰る」と言った。

「もうすぐ大河が始まるでしょ？」

彼女に時計を指されるまでもなく、もうそろそろ午後八時になるのは分かっている。大河ドラマをゆっくり見たいのは志津香であって、私ではない。

「妻の好きなドラマぐらい、一緒に見てあげな」

香織の言い分に、志津香が微笑に笑った。香織は、史穂さんたちに「お先に、またね」と言い残し、啓と里紗を連れて玄関へ消えていく。志津香をテレビの前に置いて、外まで見送りに追いかける。突っかけを履き、香織たちと外に出ると、まだまだ暑さが残っていた。

「じゃあね」と手を振る香織たちを見送っていると、私の後ろから史穂さん、陽菜、智希が出てくる。彼らは幸弘の車に乗り込んだ。

「じゃあ、また」

幸弘は窓を下げて挨拶すると、ゆっくり車を発進させた。車の中で小さく頭を下げる史穂さん、一応スマホから顔を上げて私の方を見る孫たちが少しずつ遠ざかっていった。

初出 令和三年一〇月一日 Mediumにて公開

一〇月七日（土）

土曜の昼下がりから、息子の事務所です仕事の邪魔をしないよう、平日は娘が座っているらしい席に座り、先日刷り上がったばかりのヒイラギ、第三号を読み耽っている。浪川さんでもいれば、目の保養にずっと眺めていられただろうし、哲朗くんがいれば若者の話や仕事ぶりを楽しむこともできただろうに、残念ながら今日はそれぞれ学校らしい。

浪川さんのライバルらしい上坂碧氏も、今頃は真面目に講義を受けているのだろう。中々に骨太で、底知れない暗さを称えている文体の持ち主ながら、非常に器量の良い華の女子大生というのも、興味深い。

私の後ろで盛り上がっていた会議が、どうやらひと段落ついたらしい。幸弘や森田さんが、打ち合わせスペースから順番に姿を現す。

「森田さんにも伝えておいたから」

誌面に目を落としていると、頭上から幸弘が声をかけてきた。中身にのめり込んでいたから一瞬何のことか分からなかったが、森田さんの顔を見て思い出した。「姉には僕からきつちり伝えておくんで」

「ああ、そうですか。よろしくお願いします」

私が頭を下げると、森田さんも「いえいえ、こちらこそ。いつもありがとうございます」と深々と頭を下げてくれた。

「撮影の方も、一旦学生チームはお休みですし、こちらで工夫して対応しますんで」

「勝手に言っただけですが、すみません」

「いえいえ。いつも無理なお願いに付き合っていたら、本当にありがとうございます」

「本当、本当。武藤さんも、もつとお父様に感謝しないと」

森田さんの後ろから、奥野さんが姿を現した。息子のオフィスには似つかわしくない、優美な衣装が、彼女には非常によく似合っている。化粧品特有のキツい香料も感じない。

水を向けられた幸弘は、笑顔でやり過ぎながら、「で、この後、朋子さん

は」と予定を尋ねた。

「駅からバスで戻るわ。夕方からの予約も入ってるし」

「森田さんは？」

「僕も今日はバスかな。用事は済ませちゃったし」

奥野さんと森田さんは、それぞれバスの時刻表を確かめている。手段の多い森田さんとは違い、彩都西までの本数が少ない奥野さんは、しばらく駅前で時間を潰さなきゃいけないらしい。

「嫌でなければ、お二人とも送りますよ」

私は、ヒイラギに指を挟んだまま二人に言った。幸い、今日は車で来ている。

「耳原の辺りなら近所だし、彩都西もたかが知れてるし」

「じゃあ、お言葉に甘えようかな」

奥野さんはそう言うのと、一旦鞆を椅子に置いて、ハンカチを取り出すなり、

「その前に、お手洗いに」とオフィスを出て行った。森田さんは答えを決めかねているらしい。そんな彼に、幸弘は「森田さんも乗って行きなよ。積もる話もあるみたいだし」と背中を押した。

「じゃあ、僕もお願いしていいですか？」

「ええ、もちろん」

幸弘は、私の顔を見てニヤニヤ笑いながら、「それも持って行きなよ」と言った。私が「いいのか？」と訊くと、幸弘の代わりに森田さんが「どうぞ、どうぞ」と応えてくれた。

「じゃあ、私もお言葉に甘えて」

数少ない手荷物に、ヒイラギ第三号も加える。奥野さんが戻ってくると、入れ替わり立ち替わりでトイレを済ませ、幸弘のオフィスを後にした。

一〇月一九日（木）

夕方にパッと幸弘のオフィスを訪れて、土産を置いたらサッサと帰るつもりだったのに、何故か年若い娘さんたちを前にして、居酒屋で日本酒を飲んでいる。華やかな彼女らにはあまり似つかわしくない、非常にオジサン臭い店だ。

当人らは周囲の目や私の考えなど全く気にせず、自分たちのペースでビールやつまみを頼んでいる。瑞希さんは早々に日本酒に切り替えた。

「そうか、そいつは災難だったね」

私が志津香とドライブ旅行に出かけている間に、思わぬ出来事があったらしい。「でも、武藤さんが旅行にでも行かないと、いつまでも接点生まれなかったかもね」

「それはそうかも」

沙綾さんはビールを飲み切ると、通りかかった店員を呼び止めて、日本酒の銘柄が書いてあるボードを要求した。今は階下にあるらしく、女子大生っぽい店員は「少々お待ちください」と空きのグラスを大量に持って階段を降りて行った。

「でも、お兄ちゃん的には、沙綾さんより朋子さんの方が気い使うわ、みたいに言ってたけど」

瑞希さんはグラスに並々と注がれた日本酒に口をつけ、一口啜ってグラスを小皿から引き揚げた。彼女のお兄ちゃん、晃くんでもなくても、朋子さんを目の前にするとピリツとする。朋子さんより年長者であるはずの私でも、たまに緊張してしまう。

「弟もいるし、苦手ってことはないと思うんだけど、なんか距離感が難しいんだよね」

見た目的にも性格的にもはつきりしていそうな沙綾さんに、男性が苦手という印象はない。むしろどんな男性でもいいように振り回す素質もありそうだけど、それも上手にいなす一輝くんが特別なだけであって、晃くんは彼女にとって「そこら辺の男性」と大差ない気もする。

アーティスト肌で気難しそうな人柄という点では、沙綾さんが距離感を図かねている晃くんよりも、彼女が懇意にしている一輝くんや瑞希さんの方が当てはま

りそんなもんだが、引つかかっているのはそういうことでもないのだろう。

「武藤さんの時はどうでした？ 奥さんのご兄弟とか……」

沙綾さんの問いが私に向けられ、ようやく「ああ、そういうことか」と腑に落ちる。とはいえ、志津香の兄や姉と出会ったばかりの感覚や気持ちなんて、全く覚えていない。親御さんとは別の緊張感があったような気はするが、それをどう乗り越えて、どう人間関係を構築して行ったかも覚えていない。

「ほぼ半世紀前の出来事だから、あんまり覚えてないな」

沙綾さんの落胆が、仕草に現れている。

「ご期待に添えず、申し訳ない」

私が軽く頭を下げると、彼女はハツとした表情で居住まいを正し、「こちらこそ、ごめんなさい」と謝った。私は「いやいや、気にしていないからいいよ」と彼女に言った。

「まあ、赤の他人でもないし、友達とも違うし、独特な距離感、緊張感はあるだろうね」

とつさのフォローに、沙綾さんは「ですよね」と得意げな表情で言った。コロコロ変わる表情、大きな身振りは見ていて楽しい。

「まあ、何度か会えば大丈夫じゃない？」

沙綾さんの横から、瑞希さんが笑いかけた。

「私とお兄ちゃんの兄弟だし」

長男の一輝くんと、末っ子の瑞希さんと気が合うのなら、真ん中の晃くんも大丈夫だろう。彼の顔を脳裏に思い描いてから、彼用の土産を買っていないことに気がついた。

初出 令和三年一〇月二六日 Mediumにて公開

一月一八日(土)

「爺ちゃんが子供の頃もさ、門限つてあつた？」

いつものように、智希と犬の散歩に付き合っていると、孫の方から何気ない会話を切り出された。彼は私の方を見て、興味深そうに回答を待っている。私は

「ああ、あつたよ」と答えた。

「何時だったかは覚えてないけど、せいぜい夕方とか、遅くても晩ご飯までだったかな」

半世紀近く前の話を、急に思い出そうと思ってもパツと出てこない。当時は必死だったはずなのに、それが午後六時までだったのか、午後七時までだったのか、当時の実家を思い浮かべてみても、時計の針まで思い出せない。

「どうしても遅くまで遊びたい時とか、なかったの？」

「遊びたくても金はなかったし、遊ぶ場所も大してなかったな。暗くなったら帰るで十分だったよ」

「お祭りの時とかは」

「そういう時は特別に許してもらったな。必死に約束してさ」

絶対を守るからと約束するのに、そういう時に限ってハメを外して、大目玉喰らって。またその時期がやってきたら何事もなかったかのように、守れない約束をしては雷を落とされる。そういう繰り返しだったつけ。

「やっぱり、皆んなそうなんだ」

少し肩を落とした智希の様子が気にはなつたが、私は「ああ、そういうもんだ」と答えた。そういえば、幸弘からも似たような話を聞いた気がする。陽菜が万博まで紅葉の夜間ライトアップを見に行つて、門限ギリギリで帰つてきてヒヤヒヤしたと言つてたつけ。

「まあ、お姉ちゃんの場合は、お父さんもお母さんも心配だったんだろ。年頃の女の子だしな」

今月の頭に十三歳を迎えたというのに、まだまだ線が細く、背丈も思つたより伸びていない彼に、「年頃の女の子」がピンと来るかは分からなかったが、彼はそれに何も言わず、「うん、そうだね」と納得した。

「あれ、武藤さんじゃないですか」

ファミリーマートの前で、威勢のいい大きな声に呼び止められた。智希が一瞬ビククリしていたが、相手を見て緊張を解いた。彼がリードを握っている愛犬も、警戒を解いて撫でてもらっている。

「お孫さんと散歩ですか？」

私は頷いて、「まあ、そんなところ」と答えた。

「晃くんこそ、こんなところでどうしたんだ？」

「現場がちよつと早めに終わったんで、瑞希の出迎えっす」

晃くんによると、どうやら今日はJRで京都から帰ってくるらしく、駅向こうのイトインがいつぱいだったからコッチに移動してきたのだとか。

人通りが多くないとは言え、まだ午後五時前。明るいとは言えないものの、無理に出迎えにこななくても良いような気もする。

「妹想いなんだね」

私が素直に想いを述べると、彼は「それもありますけど」と一旦言葉を切った。

「明日の打ち合わせを家の外でしたくっつて」

「明日？」

「そう、明日」

そう言えば、明日は何かイベントがあるんだっつけ。幸弘も、朝から京都まで行かなきゃ行けないとか言ってたような。

「何時に出るとか、そういう話が家だとしにくいもんで」

「あゝ、なるほど」

コンビニの前で立ち話をしていると、晃くんのスマホが鳴った。どうやら仕事の話らしく、邪魔にならないように別れの挨拶をして、智希と共に彼の下を離れた。名残惜しそうにしていた愛犬を半ば引きずるようにして、河川敷へ降りていく。

ふと、智希の横顔を見ると、ちよつぱり落胆しているように見えた表情がいつの間にか、キリツとした顔つきに変わっている。目にも力が戻っているようだ。彼は愛犬のリードをしつかり握り、下流へ向けてきびきびと歩き始めた。私も置いていかれまいと、その速度に合わせて足を進める。息が弾む速さに、身も心も少しだけ軽くなった気がした。

初出 令和三年二月二日 Mediumとして公開

一二月二一日(月)

郁美さんに頼まれていた書類を、昼休み前にスタバへ呼び出した哲朗くんにはチエックしてもらっている。授業を早めに抜けて来れたらしく、昼食でも一緒にと思ったが、ゆつくり話しながら食事をできるところが、ここの学食ぐらいしか思いつかなかった。

彼は今日も弁当持参らしく、学生さんに混じって自分だけ割安のランチを食べるのも悪い気がして、ここのコーヒーだけ奢らせてもらった。月曜日の午前中でも、近隣の主婦や商工会議所へ訪れる人がチラホラいるらしく、公園側のテラス席も含め、座席は半分近く埋まっているように見える。

書類に蓋をした万年筆を走らせながら二周してくれた哲朗くんが、顔を上げた。「うん、コレで良いんじゃないですか」

事前に何度も内容を擦り合わせ、その結果みたいな書類だから、わざわざ確認してもらうまでもない気もするけど、念のため当事者の一人を巻き込んで再提出の可能性を減らせたのなら、彼にとっても無駄ではなかっただろう。

彼は二枚の書類を私が持つて来たクリアファイルに納めた。

「データはまた、送つといてください。コレは」

「ああ、それは私が後で持つて行こう」

哲朗くんが自分の荷物として手元に置こうとしたクリアファイルに、私は手を伸ばす。彼は「じゃあ、よろしくお願いします」と、クリアファイルから手を離れた。いつもの彼なら、ここでコーヒーを持つて立ち上がり、サツと教室へ戻っていきそうなものだが、彼はペンを胸ポケットに納め、コーヒーを口に運んだ。

「コレで、一区切りですか？」

彼のゆつたりとした問いに、私は「ああ、まあ」と曖昧に応えた。

「最後が妹の誕生日会ですみません。おまけに、終わりまで同席できなくて」

「いやいや、将来有望な妹さんと出会えて光栄だよ。久しぶりに、君のお母さんにも会えたしね」

私が笑ってみせると、今度は彼が曖昧に「ははっ」と笑った。

「しかし、アレは君が生まれる前だから四半世紀以上の話かな。私の方はすつか

り忘れてたけど、流石に優秀だね」

「いやあ、そんな」

母親が褒められても謙遜してみせる息子。ウチの幸弘には、とてもできそうにない。

「妹さんのあの性格は？」

気が強いというか、上昇志向の強さは哲朗くんやあの御母堂からは想像がつかない。お父さんも何となくで知ってはいるけど、どちらかという哲朗くんを受け継がれているように思う。

「アレは僕へのアテツケというか、両親への反発というか」

哲朗くんは半分笑いながら言った。

「君も君で、お父さんに反発してるんだろ？」

哲朗くんは、乾いた笑いを浮かべながら、後頭部を手で触った。

「複雑なもんだな」

哲朗くんに向けて言いながら、他人事のような物言いに内心、「何を言ってるんだ」とツッコんだ。どこの家庭もそうそう一筋縄では行かない、当たり前の話ではないか。

「それはそうと、神戸はどうだった？」

微妙な空気に耐え切れず、強引に話題を切り替えた。

「ああ、えーつと」

哲朗くんも姿勢を切り替えて、記憶の掘り起こしにかかったらしい。私がコーヒーカーップを口元に運ぶと、彼も同じタイミングでカップを口元に運んだ。喉を湿らせて、ゆったりとした気持ちで、後日談を聞かせてもらおうじゃないか。

初出 令和三年一月二五日 Mediumにて公開

一二月二四日(日)

啓と智希に一つずつケンタッキーのバケツを持たせ、えっちらおっちら、ようやく阪急の線路を潜るところまで来た。ちょうど目の前を両側から阪急電車が行き来する。信号待ちをしていた啓が微かに喜んでいた。

隣の智希も、ついこの間まで電車に興奮していたように思うが、流石に中学生ともなると見慣れた電車には冷静な反応を示すか。

ガード下を抜け、真つ直ぐ大同町へ抜ける方が早い、歩きやすさを考慮して水尾の方から迂回するルートを選ぶ。この辺りを歩き慣れていそうな智希に、少しだけ先を歩いてもらう。

元茨木川緑地に沿って少し進んだところで、住宅街の方へ曲がった。細い道を抜けると、少し広い道路と大きな公園が見えてきた。智希はスツと公園の中へ入ると、グルつと周遊しそうな散歩道に足を踏み入れる。

小高い丘で遊んでいる子供達や、向こうの方でキャッチボールやミニサッカーに興じている小学生も見えた。啓は羨望の眼差しでそちらを見ているが、智希は歩調を緩めることなく、前へ前へと進んでいく。

「啓も居るんだし、もうちよつとゆつくり歩いたって良いんじゃないか？」

私は智希の背中に声をかけた。智希はこちらを一瞬振り返る。

「でも、あんまり冷めたら良くないし」

「それはそうだが、さすがにちよつと早い気がするぞ」

智希は「そうかなあ」と呟きながらも、少し歩幅を小さくしてくれた。彼や彼の愛犬との散歩に付き合うときは今ぐらいのペースだが、啓には少し早い。啓が無理なく付いていける速度にしてもらいながら、水尾図書館が見えるところまでやって来た。図書館には背を向けて、フレスコの隣を真つ直ぐ目の前の信号を指して抜けていく。

団地の向こうにも公園があるらしく、賑やかな声が聞こえてくる。啓はそちらにも興味津々、未練たらたら様子で智希の後を追いかけて足を動かしていた。

「遊びたいんなら、寄り道しても良いんだぞ」

「良いよ。さつきも散々遊んだし」

智希の即答に、啓は何か言いかけた口を閉じた。確かに受け取りに行く前に、岩倉町の広い公園で散々走り回ったが、啓はまだまだ物足りないだろう。同時に、智希に嫌われたくないメッセージも、啓の小さな身体からビンビンに放たれている。

「遊ぶなら、持つて帰ってから遊ぼうよ。外は寒いし」

今から公園に繰り出したところで、スペースも早々空いていない。小さなゴムボール一つで小学生を相手に中学生が延々と遊ぶには限界もある。私がつと動ければ多少は違うのだろうけど、せいぜい荷物板ぐらいが関の山。

啓は智希の「家で遊ぼう」の誘いに乗ったらしく、若干遅くなっていた歩ぎに力強さが戻ってきた。智希はそれを見て、歩く速度を少し早める。若園町の交差点を真っ直ぐ進み、水尾小学校の裏に抜けた。

道が不規則に入り組んだ住宅街の中に入り、智希の案内でどんどん幸弘たちの家に近付いていく。見覚えのある通りに出ると、聞き覚えのある犬の泣き声が聞こえてきた。智希の愛犬が、上から私たちに向かって吠えている。

周りの家の飾り付けを見ながら、今日がクリスマススイブだと痛感する。孫に手を引かれながら、家族の集う息子宅に帰ってきた。

初出 令和三年十一月二六日 Mediumにて公開

二月三十一日(日) 午前六時

家を出た時には濡れていたアスファルトも、一時間ちよつとの間にだいぶ乾いてきた。河川敷も普段より湿ってはいたが、歩きにくいと言うほどではない。それよりも、気温の方が厄介だ。風もそれなりに強く、早歩きで体温が上がったはずなのに、汗のおかげで散歩する前より冷えてしまったように思う。

帰る前に、ホットコーヒーでも飲んで帰ろう。三総持寺の駅を抜けて、ファミリーマートに足を踏み入れた。店内をぐるつと周り、今朝の食パンがなかったのも思い出して一緒に買うことにした。コーヒーは、ホットドリンクコーナーのペットボトルの奴にしよう。

会計を済ませ、イトインのコーナーに向かうと、先客が机に突つ伏して寝息を立てていた。間に一つ空けて椅子に座ると、顔が見えた。浪川さん家の次男坊、晃くんだった。

私がビニール袋をガサガサさせながらコーヒーを取り出していると、晃くんがゆっくり身体を起こした。眠そうに大きな欠伸をしながら、身体を伸ばしている。彼は片目を瞑りながら、私の方を見た。私に気がついたらしく、「あ、おはようございます」と言った。

私は「おお、おはよう」と返した。彼は、手元にある飲みかけのペットボトルを手に取り、蓋を開ける。

「早いですね」

彼は中身を飲み、口を湿らせてから言った。喉はまだ十分に開いていないらしい。

「ジジイだからね。君は、朝帰り？」

晃くんは欠伸を噛み殺しながら頷いた。

「もうちよつと行けば自宅だろう？ どうしてこんなところで」

「極楽湯でひとつ風呂浴びてから帰ろうと思って」

「ああ、なるほど」

河を越えれば、道路脇にある。土日は午前六時からだったつけ。ゆっくり入浴してから帰ったら、七時ぐらいか。変な時間に朝帰りされるよりは、そっちの方

がいい。

しかし、そもそも今日は空いているのだろうか。晃くんが水分補給している間に、スマホを取り出して検索を掛けてみた。年末年始の営業にはなっているものの、土日扱いでオープン自体はしているらしい。

散歩で私も汗まみれ。一緒に行きたいぐらいだが、買ってしまった食パンはさつさと持ち帰った方がいいだろう。少なくとも、銭湯には持って行かない方がいいように思う。

「あ、もう開いてる？」

晃くんは時計に目をやって呟いた。スマホを仕舞う前に時刻を確かめたら、確かに六時を過ぎている。晃くんは気怠そうに座ったまま身体をほぐし、ペットボトルに残っていた水分を飲み切った。

椅子から立ち上がると、店内のゴミ箱に空になったそれを放り込んだ。

「じゃあ、オレはこれで」

私は晃くんが出ていくのを、その場で見送る。晃くんは、「あつ」と声を出して、一瞬立ち止まった。

「良いお年を」

「あ、ああ。良いお年を」

彼はすつきりとした表情で、コンビニの外へ出て行った。彼と入れ替わる形で、一瞬、外のひんやりした空気が店内に入ってくる。私はだんだん温くなってきた。コーヒーを一口飲み、まだまだ残っているところに蓋をしっかり閉め、ビニール袋に入れ直した。

イトインの椅子を片付け、コンビニを後にする。帰宅したら、まずは朝食を摂って、志津香の邪魔をしないように、洗車でもしに行こう。正月用のお酒も、忘れずに買いに行かねば。

(完)